

# 蒼海 翔の暗殺教室

焰雷

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

元A組の蒼海 翔

彼は成績優秀で暴力沙汰なども一切起こしたことがなかつた  
そんな彼がなぜかE組に落ちてきた

E組に対する差別でもA組はなぜか彼を差別しない  
彼らの過去にいつたい何が

# 目 次

1 学期	プロフィールの時間	* 隨時更新
日覚めの時間	初登校の時間	自従思考固定砲台の時間
制裁の時間	集会の時間	LRの時間
中間テストの時間	班決めと準備の時間	修学旅行の時間
修学旅行の時間 1 時間目	修学旅行の時間 2 時間目	後日の出来事の時間
77	71	126
59	44	117
35	30	105
20	20	95
9	9	



# プロフィールの時間 \* 隨時更新

蒼海 翔（そうかい かける）

誕生日 2月11日

身長 木原紡とおんなじ

体重 木原紡とおんなじ

血液型 B型

容姿 凪のあすから 木原紡

性格 優しく 笑顔を絶やさない

仲間が友が危険な状態になると身を挺して  
守ろうとしてくれたり、怒る

好きな教科 国語

嫌いな教科 美術

趣味 読書 ギター 音楽鑑賞

特技 料理

宝物 家族写真

好きなもの 動物 オレンジジュース ハンバーグ

弁当 o r 買い食い 弁当

制服の着方 ネイビー色のカーディガンを着ていてボタンを付けていない。カルマとほぼ一緒だが

右の手首にリストバンドと青色と紫色の玉が連なつている  
ブレスレットをしている。

ネックレスもしていてこつちは

白、赤、黄、黒、青の順で並んでる

弱点 鈍感 絵が下手 自分のことを後に考える  
選挙ボスター みんなのために俺は頑張る??

### 能力値（5段階）

体力	5	俊敏性	4
近距離暗殺	5	遠距離暗殺	4
学力	5	固有スキル	隠密
適正（6段階）		作戦立案	3
指揮	3	実行力	6
技術力	6	政治・交渉	6 2
探査・諜報			

### 鳥間先生の評価

近接戦では動体視力と運動能力で予測不可能な動きをし

E組トップクラスの実力を持つ自分のことを考えずに突っ込んでいくためよくけがをする  
ワイヤートラップと二刀流でターゲットの触手を正面から切つた、これから暗殺の中心人物になるだろう

### E組から見た翔の印象

カルマ→何となくいじりたくない  
磯貝→なんか心に抱えてそう  
岡島→このリア充め!!!  
岡野→すごい運動神経

奥田→頭がいいひと

片岡→岡島、前原制裁に加わってくれる

茅野→本人は気づいてないけど本校舎の女子からモテている  
神崎→鈍感ですね

木村→一回走りで勝負してみたい

倉橋→動物好きで気が合う

渚→いい人

菅谷→絵が下手

杉野→気軽で優しいな

竹林→メイド喫茶に連れていきたい

千葉→なんでも使いこなせるな

寺坂→二人がいじつてない

中村→何となくいいじりたくない

狭間→鈍感ね

速水→銃はまあまあだけど尊敬してる

原→料理がうまい

不破→モテてるね

前原→刀使う姿がかっこよかつた

三村→主演映画を作りたい

村松→ラーメンのアドバイスをしてくれる

矢田→本校舎の子から写真撮つてきてと頼まれたことがある

吉田→運動神経いいな

翔から見たE組

カルマ→みんなによくいたずらしているな

磯貝→前、一緒に歩いていると本校舎の女子から黄色い歓声が上がった、モテている  
んだな

岡島→よく睨まれる

岡野→身軽だな

奥田→いろいろ作れてすごいな

片岡→頼りになる

茅野→プリンめっちゃ好きだね

神崎→おとなしいね

木村→足が速い

倉橋→動物好きとして気が合う

渚→よく話す カルマと中村にいじられている

菅谷→絵がうまい

杉野→野球が好きだな

竹林→メイドがどうとかこうとか

千葉→射撃がすごい

寺坂→不良っぽい

中村→カルマと一緒にいたずらしている

狭間→呪いがどうとかこうとか言っていた

速水→すごい動体視力

原→料理の腕が俺と互角

不破→漫画を勧められる

前原→ちやらい

三村→映画監督とかになりそう

村松→料理の腕が俺と互角

矢田→優しい

吉田→バイク好きだな

明 翔が作つた人工知能、口は悪いが優しい心の持ち主  
容姿 シャーロットの乙坂有宇

# 1学期

## 目覚めの時間

月が三日月になつて初めての4月

鴨ヶ丘中学校3年E組に月を破壊した人物（のちに殺せんせーと呼ばれる）  
が担任をし始めたころ

とある病院

ある病室で一人の男の子が目を覚ました

男の子はただ天井を見つめていた

そこに、看護師さんがきて男の子が目を覚ましているのに驚くと主治医に  
急いで知らせた

男の子はこの流れをぼんやりと聞いていた

やがて主治医がやってきて検査をしてもらつた

ただし、集中治療室の中で酸素マスクを外してもらつて

「…」は？」

男の子は目を覚まして初めて言葉を発した

「…」は竹林総合病院だよ」

主治医の人もゆつくりと喋った

「目が覚めたっていう知らせをしたからもうじき来るよ」

「誰ですか？」

「『浅野』って言つてたかな」

そういうと主治医は集中治療室を出て行つた

しばらくしたら浅野理事長が来た

「蒼海君、目が覚めたんだってね、大丈夫だつたかい」

「おじ：理事長、大丈夫ですよ。ところで俺いつからここにいるんですか」「確か、『あの事件』からちようど一ヶ月だね」

蒼海と呼ばれた男の子は一ヶ月という言葉にわずかに目を見開いた

「…本当にですか、そんなに眠つてたんですね、俺」

「ほんとにびっくりしたよ」

そういうながら二人とも笑つていた

沈黙が辺りを支配したとき

蒼海が口を開いた

「：俺はやつぱり』 E組』 行きですか？」

「ああ、そうだよ。今の君ではA組どころかほかの組にさえ追いつけないだろう  
一ヶ月というブランクがあるから」

「予想はしていましたけどね…」

「たぶん、君はもう今年中には『 A組』 には戻れないだろう。自分の夢のために

君は外部受験しか方法がない

「…いいですよ。やってやります」

そういう蒼海の目は少し悲しそうだった

翌日

彼は集中治療室から一般病棟の個室へと移っていた  
リハビリも終わり何もすることがないのでテレビを見ていると  
ドアがノックされた

「どうぞ」

入ってきたのは浅野学秀だった

「翔、けがの具合は」

翔、どうやらこの子の名前らしい

「大丈夫だつて、『学秀』」

「…翔、君はE組行きになつたそつだね」

そういうと少し翔は悲しそうな表情をした

「今年中にはもうA組には戻れないつて言われたよ、残す方法は外部受験だけだつて」

「…そつか、みんなも心配していただぞ」

「ありがとう…でも俺はもうA組じやない」

悲しそうな表情を浅野は見た

「皆からの伝言だ『来年、A組で待つて』だと、だからこの一年耐えてくれよ」

「…皆にそういうわれちや仕方ないよな。なあ、学秀、学校では俺のことはどういわれてい  
るんだ？」

「…校則違反、そつらしよ…A組は納得していないけれど」

「俺、E組でも頑張るよ。ブランクをなくして、来年にA組に入れるように。学秀、やるからには

全力で倒しに行くからな」

翔はいつもの笑顔で言つた

「なあ、呼び名変えるか…E組に仲良くしている奴がいるってことが知れたら、ほかのクラス

がどういうか」

「いつも通りでいいよ、こうすれば君への嫌がらせを少しは防げるだろうからね」「わかつた：皆に伝えておいてくれ”来年、待つてくれ”ってな」

「わかつたよ、お前と全力で戦うからな。理事長の罠にははまるなよ」

「了解した、じやな、学秀、またいつか話そつな」

「ああ、もちろんだ、翔」

そういうと浅野は出つて行つた

無事に退院したあと、自分の家に向かつた

「ただいまー…って誰もいないんだつた」

家のなかは静まり返っている

翔は自分の部屋に向かうとパソコンを付けて、名前を呼んだ

「おーい、明（あきら）ー」

何度も呼んでいると画面上に小さな男の子が現れた

「このばかける、てめえ今までどこに!!!」

「病院にね、一ヶ月、意識不明だつたみたい」

「そういう理由か…なら、許す」

「明日からE組だつてさ、早起きしないと」

「せいぜい、頑張れよ」

そういうと学秀が新しく買ってきたスマホ（中身は変える前と変わりなし）明を入れた

次の日

E組に行くのは明日と迫つてきたとき  
急にインターホンが鳴った

何だろうと思つて確認したら、スーツ姿の男が立つていたので驚いたが  
明が武器は何も持つていないといつたので  
ドアを開けた

「あのー、どちら様でしようか？」

「君が蒼海 翔君かい」

「はい、そうですけれど」

「俺は、防衛省の鳥間というものだ」

「まあ、立ち話も何ですから、どうぞ中へ」

とりあえず中に入れコーヒーを注ぐ  
その間、鳥間さんは礼儀正しく待っていた

「すまない、ありがとうございます」

「砂糖とミルクいりますか？」

「いや、別にいい」

コーヒーを飲んで一息ついたところで

「…何の用ですか、防衛省が」

翔は要件を聞いた

「单刀直入にいう、君はE組に明日から行くね」

素直にうなづく

## 18 目覚めの時間

「そこでこいつを暗殺してほしい」

鳥間さんが出してきた資料を見ると

黄色いタコがいた

「えっと、なんですかこのタコ?」

「今の大組の担任だ：月が三日月になつたことは知つていてるかい」

鳥間さんが聞くと翔は頭の周りに？が浮かんでいた

「月が三日月に？なんで」

「知らないのかい！」

「つい最近まで意識不明だつたんですよ”一ヶ月”」

そういつた後、窓に行き月を見る

「あ、本当に三日月だ」

「話を戻すが……この担任をE組生徒が暗殺しようとしている

あいつは来年の三月には地球を爆発するといつていた、

これに君も参加してほしい……賞金は100億円だ」

「……まあ、いいですよ。地球がなくなったら困りますし」

「ありがとうございます、武器は明日職員室で渡そう、ほしい武器はあるか」「だつたら、剣2本 軽めとワイヤーって用意できますか」

「手配しよう……俺も体育の教師としているから、よろしくな」

「お願ひします、烏間先生。俺のこと翔でいいですよ、ちなみに

一ヶ月寝てたつて話、内緒ですよ」

こうして蒼海 翔が暗殺教室に加わった

# 初登校の時間

鳥間さんが家に来た

次の日

彼はE組のある山へと向かつていった  
だが、 桐ヶ丘中学の本校舎が見えてきたとき

「離してください!!」

声が裏路地から聞こえてきた  
翔は心配になつて気づかれないように、見てみると  
桐ヶ丘中の制服を着た女の子が不良っぽい人五人に  
囲まれていた

「別に、いいじやねえか。俺らと遊ぼうぜ、お嬢ちゃん」

この言葉を聞いた瞬間、笑つてしまいそうになつた  
お嬢ちゃんつて

けど、こらえて女の子のもとに向かつた

「私、これから学校なんです、だから行かないと」

「…調子に乗るなよ、いいからさつさと来い!!」

不良の一人が女の子の腕を掴もうとした時

「…お前らのほうが調子に乗るなよ。嫌がつてるじゃないか」

翔はその腕を掴んで、女の子と不良の間に割つて入つて  
女の子を後ろにかばつて、対峙した

「なんだよ、てめえは!!ヒーロー気取りかよ!!」

掴まれていた人が殴りかかつてこようとした

「危ない!!」

女の子が叫んでいたが、翔は近くにあつた鉄パイプを掴んで  
男の攻撃を防いだ

「かかつてこい…」

そういうと同時に不良五人が襲い掛かつてきたが鉄パイプで  
けがをしない程度にたたいて  
こういった

「ささつと、帰れ」

不良達は

失礼しました!!!  
と言つて帰つていつた

「けがはない?」

翔は鉄パイプを下して、女の子に声をかける

「大丈夫です、ありがとうございました」

女の子がお礼を言つてくるが

「大丈夫だつて…君、 榛ヶ丘中の子?」

そう言つたら女の子は俺もおんなじ制服を着てているのに  
気が付いて、俺の顔を見てきた

「もしかして、 A組からD組のどなたかですか?」

そういうつてくる彼女が悲しそうな表情をしていたので

「いや、今日からE組だ」

そう言つたら彼女はすぐに笑顔になつた

「じゃあ、おんなじクラスだねえつと」

「蒼海翔。よろしくな」

「私、倉橋陽菜乃、よろしくね。蒼ちゃん（そうちゃん）」

「…蒼ちゃん？ 何それ、倉橋」

「私、あだ名で呼ぶの好きなんだ」

「わかったよ。どうせ行く場所も同じだし一緒に行くか」

「うん、ありがとう！」

二人でE組校舎に向かつていつた

「じゃあ私、教室行くね。また後で」  
「おう、またな」

玄関で倉橋と別れて教務員室に向かつた  
ドアを開けるとそこにいたのは

鳥間先生と金髪のやけに露出が多い女のひと  
⋮そして、エロ本を持つている黄色いタコ  
俺は無言で一回ドアを閉めた

しばらくして、もつかいドアを開けた  
⋮タコはまだエロ本を読んでいて

入ってきたのに気づいたのは鳥間先生だけだった

「おい、タコ、生徒が見ているぞ」  
「ニユヤー!!」

黄色いタコが急いで片付けた  
呆然としてみていると

鳥間先生が武器を渡してくれた

「頼まれていたのは、もうちょっとかかるから  
今はこれだけだ」

ハンドガンとナイフ、ピンク色の弾を渡してくれた

「君が停学明けの蒼海翔君ですね。私のことは  
殺せんせーと呼んでください」

「…よろしくな、殺せんせー」

「では、教室に向かいましょう」

殺せんせーの後についていくとチャイムがちょうど  
鳴つたので、教室前で待つていると

「では、日直のひと号令を」  
「き、起立！」

ガチャガチャ  
なんだ?

「礼!」

そういうと同時に銃の発射音が聞こえてきた

「発砲した今までいいので出欠をとります

カルマ君

「はーい」

「磯貝君」

「はーい」

⋮

「今日も命中弾なしですね。弾を片付けてください

停学明けの子が待っていますから」

「はーい」

## 28 初登校の時間

しばらくして

「では、入ってきてください」

よし、入るか

教壇の前に立つて

「蒼海翔です、よろしくお願ひします」

笑顔を見せて言つた

「蒼海君の席は奥田さんの後ろです。奥田さん」

「は、はい」

席に着くと

「では、先生、ジエラートを買いに」

窓を開けるとマツハ20で飛んで行つた  
皆が俺の周りに集まつて自己紹介と質問をしてきたので  
答えた。

例えば

好きな食べ物は

A, オレンジジュースとハンバーグ

趣味

A, 読書、ギター、音楽鑑賞

など

休み時間にたくさんの人人が来た

# 制裁の時間

停学明けの放課後

岡島と前原が片岡を中心とした女子たちに説教をされていた

「ねえねえ、なにこれ渚君？」

さつきまで外にいたカルマ君が僕に聞いてきた

「二人して、エロ本を読んでいて、女子たちのカップ数を

聞きたくて、予想していたんだって。そこに岡野さんが来て今に至るつてわけ」

「でも、すぐに謝ればいいのに、さらに説教を受けてるの？」

「ああ、翔に罪をかぶせようとしたんだと」

杉野が会話に入ってきた

「それと、僕たちにもね」

「僕たちって？」

「磯貝君、千葉君、僕、杉野、カルマ君」

「ふうーん、で、翔は今どこに」

「女子たちが制裁しようと探してて、さつき見つけたんだけど

放課後、すぐに殺せんせーに補習を食らつてつて、問い合わせたら  
まだ、二人とはそんなに話していないんだつて。

これは殺せんせーにも確認済みだから、余計に説教中

「…自業自得だね。で、磯貝と千葉は」

「この二人はたまたま殺せんせーにわからないとこ

聞きに行つていたから、翔君と一緒にいたから

大丈夫。で、僕たちのところにはまだ

誰も来てないよ」

「それって、もうじき来るんじや」

その時、翔君が帰ってきた

「やつと、終わつたー」

「あ、お帰り、翔君、どうだつた」

「あの見た目のくせして、授業の腕がいいから少し腹が立つた」

「…なんかわかるそれー」

「何の話してたんだ？女子が急に俺たちのところに

来たんだが」

「ああ、それはね…あれを見ればわかるよ」

「何だあれ」

「実はね、」

僕はカルマ君に話したのと同じことを

翔君にも話した

すると、女子が僕たち四人のもとに來た  
正確には、中村さん、倉橋さんだけだが

「ねえ、あんたたちもこのことに加担しているって聞いたんだけど  
それって、本当？」

「…僕たちがそんなことするように見える？」

「…見えないけど、確認。で、どっち」

「…「断じて、やつてない！」」

「そう分かつた」

その時、倉橋さんは

「うん、ありがとねー（よかつたー、蒼ちゃんが加担してなくて  
…あれ、なんでよかつたんだろう？）」

「なんか、俺たちにも罪かぶせようとしたんだね。ねえ、翔」

「？なんだ、カルマ」

「制裁、一緒にやらない？」

「俺も腹が立つたから。いいぜ、やろう」

「よーし、中村。別にいいよね

「あいよ、メグメグ」

「？なに、中村さん」

「二人が腹が立つたから制裁してくれるって」

「じゃあ、ひなたも頼んでいい」

「了解：さあて、前原、覚悟できる？」

このあと、みんなが帰った教室には

岡島君と前原君らしきものがあつた

# 集会の時間

次の日

昼休みにE組生徒たちが山を下りていた

「ああ、もう、なんで私たちだけこんな目に」

後ろで岡野が怒っていた

すると

「待ちなさいよ、あんたたち!!」

イリーナ先生が駆け下りてきていた

そのまま、俺たちの横を通り過ぎつて行つた

「大丈夫かな、ビツチ先生」

隣で倉橋が言つた

ちなみに一緒に降りているメンバーは  
渚、杉野、俺、倉橋、岡野、茅野、奥田だ  
突然

「お、岡島ー!!」

寺坂達の声が聞こえた

すると

大量の蜂がこつちに向かつてきていた

：俺らが驚いたのはそこじやなくて

大量の蜂を連れていたのが“岡島”だつた

「どけ、お前らー!!」

「「「「岡島（君）!!」」」

イリーナ先生と一緒に横を駆け抜けていった

「なんか、いろいろと巻き付いていたな」

「昨日の罰が下つたのよ」

俺と岡野が喋つていって、みんなは岡島に

合掌していた

そのあと

「岡島ー」、「岡島君ー」、「うわああああ」

E組の山には岡島を呼ぶ声と絶叫が響き渡つていた

「きやあー」

行く途中に倉橋が足をひねったようだ

「大丈夫？ 陽菜乃ちゃん」

「大丈夫だよ、ひなちゃん」

そう言つて立とうとするがうまく立てないらしく  
ここには岡野と倉橋と俺しかおらず、皆は先に  
行つてしまつた

「校舎に戻つたほうがいいんじゃないか」

「でも、どんな理由があつても、出なきやいけないし」

「前は、校庭の雑草抜きだつたよね」

考えていると、俺の頭に一つ案が上がつた

「倉橋……一つ方法がある。嫌なら言つてくれよ」

「？」

そういうと俺は倉橋に近づいて、ウエストバッグから湿布を取り出して足の腫れた場所に貼ると肩と膝裏をもつて

お姫様抱っこをした

「え、ちょっと、蒼ちゃん！ 大丈夫だつて」

「悪化したら大変だろ、ほれ、行くぞ。岡野も」

「あ、うん」

そう言つて早足で山を三人で降りて行つた

本校舎の運動場ではE組全員がへばつていた  
特にイリーナ先生が

「無理してついてくることなかつたのにな。ビッヂ先生  
ヒール履いてるんだから」

菅谷がそう言つていると杉野があることに気づいた

「あれ、翔と倉橋と岡野は？」

「一緒に降りてたんだけど…はぐれたのかな」

「それとも、どこかで倒れたかな」

「倉橋はともかく他の二人と一緒にいるから大丈夫だろ」

杉野、渚、茅野、前原の順で喋つていると

山から声が聞こえた

「ほら、蒼海。早くしないと遅れるよ！」

「わかつてゐるつて」

二人が山から出てきたら

皆が驚いた

それは

翔が倉橋さんをお姫様抱っこしながら山を下りてきたから

「どうしたの、蒼海君」

「メグ、陽菜乃ちゃんが足ひねつたみたいで、蒼海が連れて  
来てくれたの」

岡野が丁寧に説明した後

ずっと疑問に思っていたことを言つた

「なんで、翔君は湿布持つてるの？」

皆も疑問に思つたのか頷いてくれた

「ウエストバツクに絆創膏とか少ししたケガを治療できるように  
一緒に入れてるんだ」

「すごいね」

翔は倉橋を降ろしながら喋つていた

皆で体育館に向かつていると

岡野が倉橋に喋つていた会話は聞こえてこなかつたが

「ねえ、陽菜乃ちゃん。顔赤いよ」

「そんなに赤い!?」

「…まあ、頑張りなよ」

集会が始まるとE組いびりが始まつた

けど、途中殺せんせーが来たりして無事に終わつた

帰り道、倉橋と一緒に帰ろうとしていると  
自動販売機の前で渚が絡まっていた

「なんとか、言えよE組!!殺すぞ!」

「…殺そうとしたことなんてないくせに」

それを見ていたら、烏間先生が来て殺せんせーに倉橋を  
運ぶように言つていた

俺も帰ろうとすると、学秀が前から歩いてきて  
すれ違いざまに

「頑張れよ、翔」

「わかってるさ」

この会話を聞いたのは近くにいた五英傑だけだつた

# 中間テストの時間

桐ヶ丘中ではもうじきテスト…  
このE組でも熱血教師がいた

「さあて、みなさん、この時間は高速テスト勉強強化  
を行います」

「…なに、これ？」

俺が殺せんせーに問うと

「こ、こではもうじきテストがやつてきます」

「そこで、このE組も頑張つてくださいね」

「…もしかして、マンツーマン授業？」

「正解です。翔君」

「皆さんの苦手をなくしますよ」

そういうと一人一人に別のハチマキをした殺せんせーがついて勉強を始めた

「下らねー、ご丁寧に教科別のハチマキとか

：なんで、俺だけ、NARUTOなんだよ!!!!」

「それ言うなら、俺のハチマキ、一体何？」

「これは、作者が考えたロゴです」

「本に帽子に仮面、なにこれ」

・・・・・それは、美術の授業で自分のロゴを考えたときに  
趣味で書いていた小説の主人公をベースに作つた  
本屋のマークだよ（\*^\_^）▼・・・・・

「つて作者が言つてたよ」

「メタイよ、不破さん!!!」

「つていうか今の天の声、誰だよ!!!」

・・・・・ 私だよ、作者だよ・・・・・

「だから、メタイつて!!!!」

「渚君、翔君、座つてください（――――）

「殺せんせーだつて、なんとも言えないと顔してるじやん!!!!」

・・・・・このままじや、終わらないから先に進めるよ

――――――

「おいこら、待て作者！」

## 次の日

殺せんせーの分身は倍以上に増えていた

何かあつたのか、渚に聞いたら

理事長が来て挑発していつたらしい

休み時間になると殺せんせーはへばつていた  
どうやら、巨乳女子大生とお近づきになりたいからだ

「昨日、強引に終わらせられたな」「確かにね」

渚と喋つていると

「皆さん、校庭に出てください」

殺せんせーが突然言つたので  
驚いていると、鳥間先生と、イリーナ先生も  
呼んできてほしいといわれたので  
俺が呼びに行つた

校庭に集まると、殺せんせーはくるくると、回転し始めた

「イリーナ先生、プロの殺し屋として聞きます」「相手を殺すときに用意するプランは一つですか」

「いいえ、本命のプランは思つたように行くことのほうが少

ないわ、不測の事態に備えて予備のプランをより綿密に作つて  
おくのが基本よ」

次に鳥間先生を指さした

「鳥間先生、ナイフ術を教えるとき、重要なのは第一撃だけですか？」

「第一撃はもちろん最重要だが、強敵相手に第一撃は高確率でかわされる、  
そのあとの第二撃、第三撃も重要だ」

前「それで一体何が言いたいんだよ!!」

前原が言った

殺「もし、先生が殺されたら、皆さんの前から消えたら、君たちには“E組”  
の劣等感しか残りません

そんな君たちに先生からのアドバイスです

第二の刃を持たざる者は…暗殺者の資格なし!!』

そういうと急に回転し始める

殺「校庭に雑草や凸凹が多かつたので手入れしました」

めちゃ校庭きれいになつてるんですけど…

殺「もし、君たちが自信を持てる第二の刃を示さなければ  
この一帯を校舎ごと平らにし先生は教室から去ります」

殺「明日の中間テストでクラス全員50位以内に入りなさい」  
皆「!!!!!!」

殺「皆さんの刃は先生がしっかりと育てています。自信を  
もつて振るつてきなさい、成功させ胸を張るのです。

自分たちが暗殺者であり…E組であることに!!!」

帰り道

渚とカルマと一緒に帰つていると

理事長が理事長室からこちらを見ていた

気がしたが結局何もなかつたため

普通に家に帰つた

中間テスト

皆は殺せんせーのおかげで今まで怪物に見えていた  
問スターが魚に見えたり、解けるようになつていたが  
背後から見えない問題に押しつぶされた

テスト範囲が大幅に変更されていたのだ

返却時

「先生、皆さんに顔向けてできません。この学校のシステムを忘れていました」

そこに隣の席の奴がナイフを投げる

「いいの？顔向けできなかつたら、俺が殺しに来るのも見えないよ」

「カルマ君！先生は今落ち込んで」

教卓にあるカルマのテストを皆が見ている

「俺、問題変わつても問題ないし」

皆が答案用紙を見てびつくつりしている

赤羽業 186人中5位

数学 100

国語	9	8
英語	9	8
理科	9	9
社会	9	9
5教科合計	49	4点

「すげえよ、数学なんて100点だぞ」「俺だけじやないよ、ほらこれ見て」

そういうと誰かの答案用紙を出した

俺は机を見ると俺の答案用紙がなかつた

「ちよ、カルマ!!それ、俺の!!」

皆はもう答案用紙を見ていた

蒼海翔 186人中2位

数学	100
国語	98
英語	100
理科	99
社会	100
5教科合計	497点

「すげえーな、こつちなんて数学、英語、社会

は満点だぞ」

「二人ともどうして」

「あんたが俺らの成績に合わせて余計なところまで  
教えてからだよ」

「カルマの言うとおりだ、本当に教えた範囲まではが  
テスト範囲だつたぞ」

「俺らはここ出ていかないよ。元のクラスに戻るより、  
暗殺のほうが楽しいし」

「んで、殺せんせーはここからしつぽ巻いて逃げちゃうの？」

それって、結局殺されるのが怖いだけなんじやないのー?」「やめとつけつてカルマ、殺せんせーはビビりなんだから」

二人が煽つて いることに気づいた  
みんなが殺せんせーを煽り始める

「にゅやー! 逃げるわけではありません!

期末テストでリベンジです」

中間テスト 終了

俺は学秀にメールを送った

(勉強の遅れくらい、すぐに取り戻せるさ

甘く見すぎなんだよ、理事長とA組は  
けど、俺は外部受験するぜ。

一回、お前らと、本気で敵として  
戦つてみたかったんだ  
手を抜くなよ)

その時に俺は考え方をしていた

本当にここに来ることを拒まなかつた  
目標はまだ達成できていないんだから  
今、本校舎に戻つても、どうにか  
なるとは限らない。：理事長に  
少し恥かかせてやりたいし、  
あのひとの教育方針は気に入らない  
底辺から突き崩してやる、  
学秀、お前とも味方としてじやなく  
敵としてやりたかつたからな

## 班決めと準備の時間

桜ヶ丘中学校ではもうすぐ修学旅行…

「蒼海君、修学旅行の班、もう決めた?」

「?修学旅行の班?まだ決めてないけど?」

「決まつたら、私が磯貝君に言つてね」

そういうと片岡は矢田たちのところへ行つた

修学旅行の班か?どうしようかな

悩んでいるとカルマが来た

「ねえねえ、翔、一緒の班になんない?」

「いいのか?」

「いいよ、さあ行こう」

「修学旅行の班かカルマ君一緒に班にならない?」

「うん、オッケー!」

「大丈夫かよカルマ、暴力沙汰とか起こすなよ」「大丈夫、旅先での喧嘩は目撃者の口もちゃんと封じるし、表ざたにはならないから大丈夫」

カルマ君が写真をもつて言っている

悪魔の角としつぽが見えるよ!:

「で、班員は俺と渚君と杉野に茅野ちゃん、倉橋さん

「あ、奥田さんも誘った」

「男女一人ずつ足りなくない?」

「(\*^\_^\*) ヴィの時のためにだいぶ前から誘っていたのだ

クラスのマドンナ、神崎さんはどうでしょう!」

「おお、異議なし!」

「よろしくね、渚君」

神崎さんはおとなしいけどクラスのマドンナだ  
そんな人と一緒になつて嫌な人などこのクラス  
にはいない

「それで、あと一人はどうしますか」

そう、問題はあと一人だ

カルマ君が倉橋さんを見た後に言つた

「じゃあ、俺連れてくるよ」

自分の席へ向かつていった  
と思つたら翔君に話しかけた

「ねえねえ、翔、一緒の班になんない？」

「いいのか?」

「いいよ、さあ行こう」

翔 side

カルマに誘われて四班に合流して回る場所と暗殺ポイントを決めていた

鳥間先生が言うには腕利きのスナイパーが狙撃するらしい

案を出し終わると殺せんせーが辞書を運んできた

「一人一冊です」

そういうと配り始めた  
予想よりも重い：

「殺せんせーなんですかこれは?」

「修学旅行のしおりです」

「イラスト解説の全観光スポットに京都の人気お土産  
トップ100

旅の護身術入門から応用まで先生昨日徹夜で  
作りました

ちなみに初回特典は組み立て式5千分の1ペーパー  
クラフトの金閣寺です」

「楽しみにしすぎじゃない：殺せんせー」

俺が言うとみんなが同意をしていた

しおりを机の上に置くと倉橋がふらふらしていた

「倉橋、大丈夫かよ。ほら、持つてやるから、さあさつと  
決めようぜ」

「ありがとう、蒼ちゃん」

無事に暗殺場所も決まって  
皆が家に帰った

修学旅行、前日…

明日のために買い物に来ていた

青Tシャツにスキニー・パンツ、カーデイガンを着て  
スニーカー、ネットクレスにブレスレット、リストバンド  
を付けて、マイバックとウエストバッグを持つていた

「歯ブラシと湿布と絆創膏に…おつ、新しいタイプの傷薬か  
これも買つところ」

修学旅行に関係のないものまで買つているが…

「さあて、買い物終わつたし、どこかで昼食べてから  
帰るか」

ショッピングモールの中にあつたところで食べてから  
帰ろうとした時

「や、やめてください!!」

悲鳴が聞こえてきた

聞き覚えのある声だったので行つてみると  
：倉橋さんがまた絡まれていた。二人組に  
ん？よく見たらあいつらこの前、道の邪魔になつてたから  
叩きのめした奴らの中にいた気が…まあ、いいや  
助けるのが優先！

近くに行くと、会話がはつきりと聞こえてきた

「…まあ、いいじゃねえか。俺らと遊ぼうぜ  
“お嬢ちゃん”」

その言葉はやつてるんですか？

「私、買い物の最中で」

「そんなの後々、行こうぜ」

倉橋の腕をとつて強引に行こうとしたが

それでも抵抗を続けていたら

男が切れて連れて行こうとした時

「…あ、いた。陽菜乃ー！」

タイミングを見計らって声をかける

「どこに、行つてたんだよ。探ししたぞ（会話、合わせて）」

「（わかつた）ごめん、少し離れた場所にいたんだよね」

「そうか、よかつた。…ん、あの、お兄さんたちは」

「お前、あの時の…」いつの彼氏か」

「そりだけど、なに？まさかナンパしてたの？」

「だったら前みたいに『OHANASHI』する？」

「！い、いえ。し、失礼しましたー！」

そういうつて、二人組は帰つていった

「大丈夫だつたか、倉橋」

「大丈夫だよ、ありがとね、蒼ちゃん」

「いいよ、ところで修学旅行の買い出し？」

「そりだよ、一人で来たらまた絡まれちゃつて」

「…だったら、終わるまで護衛としてついているよ」

「！そんな、悪いよ」

「俺がしたいんだから別にいいだろう。…また、ナンパに

絡まるの嫌だろう」

「うつ、じやあ、お願ひします//／＼

「じやあ、行こうか」

そのあと、俺が隣にいたおかげか倉橋に声をかける奴は  
一人もいなかつた

ただ、店の中にはいつて、よく、カツプルに間違えられた

「ありがとね、蒼ちゃん。一日付き合つてもらつちやつて」  
「べつにいいぞ、ていうかこれどうする」

そういうつて俺が出したのは店に入つたらカツプル記念として  
配られていたイルカだつた。俺は青で、倉橋はピンクだ

「せつかくだし、ケータイにでも付けとく? 友達記念として／＼＼  
「そうだな、ケータイに何かつけようと思つていたんだ」  
「お揃いだね」

「ああ、そうだな」

話していると倉橋の家の前までついた

俺は倉橋の荷物も持つていたので  
渡した

「じゃあな、また明日。ちゃんと眠れよ倉橋」

「うん：あの蒼ちゃん」

「？なんだ」

「…助けてくれた時みたいに名前で呼んでくれないかな」

「…わかった、陽菜乃」

「ありがとう、翔君」

「…なんか、照れくさい」

「そうだね」

一人で話していると、玄関の扉が開いた

「あら、陽菜乃。帰っていたの」

「ただいま、お母さん」

「おかえり、そちらの方は」

「蒼海翔君、クラスメイトで今日ナンパされていたのを助けてくれたの」

「あら、そうだつたの。ありがとうね」

「いえいえ、こちらこそ陽菜乃さんにはお世話になっています」

俺がお辞儀をすると陽菜乃の母はにやにやしていた

「じゃあ、俺はこれで帰るから。また、明日。陽菜乃」

「また、明日。翔君」

俺が帰ったあとこんな会話がされていた

「陽菜乃、いい子じやない。あんた、彼のこと好きなんでしょう」

「！なんでわかつたの／＼／＼

「頑張りなさいよ、お母さん応援してるから」

# 修学旅行の時間1時間目

修学旅行

校長の長い長い話を聞き終わつた後  
ホームに来ていた

「A→D組までグリーン車、対してうちらは普通車  
いつものことだね」

中村が愚痴つていると

D組から前に渚をからかつていたひよろつちいのと  
デブが出てきた。ついでに大野？だつけD組の担任も  
來た

「学費の用途は成績優秀者に優先されますー」

「おや、君たちからは貧乏のにおいがするね」

少し腹が立つたので軽めの“OHANASHI”しようかと思つたが  
もつといい方法を思いついたので実行してみることにした

「うるさいぞ、モブキヤラ2組、たかがグリーン車ごときで

威張るな、嘆かわしい…」

「！なんだと、E組ごときが」

「威張るなら、俺より成績優秀になつてみろよ」

「僕らが君に負けてるはずがないだろう、中間テスト

“何位”だ（＊、艸、）

「（、ー、）v2位だけど」

「…はあ！そんなわけないだろうE組ごときが」

「E組ごときつてうるさいな、俺の名は蒼海翔だ」

「!!な、あの、本当かよ」

「わかつたか、威張りたいなら。俺の成績を

超えてみろよ。モブキヤラ2組」

モブキヤラ2組が帰つていったので車両に乗り込もうとすると  
イリーナ先生が派手な服装で来たが鳥間先生に怒られて  
ジヤージに着替えていた

「あれ、殺せんせーは？」

4班全員でポーカーをしていると

渚が不意に言った

「確かにな……って。何してんの！殺せんせー！」

俺が窓を見ながら言つた

皆も見ると殺せんせーが窓に張り付いていた  
次の駅で殺せんせーは乗つてきた

「つてか殺せんせー、この駅までマツハで来とけばよかつたんじや」

殺せんせーはしまつた——! という顔をしていた

「あつ、みんな飲み物買つてくるけど何がいい?」

「あ、私も行きたい」

「私も」

「行く行くー」

神崎がそういうと茅野、奥田、陽菜乃も行くと言つた

「俺、イチゴ煮オレ」

「僕はお茶」

「俺はスパドリ」

「俺はオレンジジュースかな」

カルマ、渚、杉野、俺の順で頼んでお金を渡した

そのあと、少し目で追つていたら高校生?に神崎が  
ぶつかるのを視界の隅にとらえたが  
ポーカーの続きをしていくすぐにそちらに意識を向けた

駅に着き旅館へ行こうとみんなで移動したが  
殺せんせーは旅館に着くとグロッキー状態になつていた  
皆が心配しながらナイフを振るうが当たらない  
どうやら、乗り物に酔うらしい

それどころか忘れ物をしたので東京に一度帰るだつて  
あんだけの大荷物でと思つた  
中を見ると

鍋、ネギ、豆腐の鍋の食材類、キャンプセット

「なんなんだ、これ」

「「「「「関係ねえだろ!!」」」」

## 76 修学旅行の時間 1 時間目

神崎がメモ帳をなくした以外は普通に1日目終了…

# 修学旅行の時間2時間目

## 修学旅行二日目

俺たちは京都の町を散策していた  
殺せんせー暗殺のコースの確認だ

「でもさ、京都に来たんだから普通に回りたかったよな」  
「暗殺とは無縁の場所でさ」

「そんなことないよ、杉野、茅野。ちょっと来て」

渚についていくとコンビニの前に坂本龍馬の  
墓があつた

「京都は昔から日本の中心だった。ここでは  
数々の有名人が暗殺されている」

「確かに、何となく殺せんせーが作つたしおり

暇だつたから読んでみたけど、織田信長  
とか書いてあつたな」

「翔君、読んだのあれ?!」

「イラストも描いてあつたから、結構面白かつたぞ」

「例えば、鴨川でいやつくカツプルを見たときの  
自分の慰めかたとか、舞妓さんにであつたときの

写真の撮り方とか」

「それ関係ないよね…」

4班のみんなは読んだことと内容にあきれていた

神崎の希望コース、祇園に到着した

「確かに人通りも少ないし暗殺にぴったりだな」  
「じゃ、ここに決定ー！」

俺と茅野が喋つて いると

「まじ完璧、 なんでこんな拉致やすい場所歩くかね」

高校生が 10人くらい出てきた

「誰だ、 あんたら?」

「男に用はねえ、 女を置いておうちに帰つたほうが  
身のためだぜ」

俺が言つたあとカルマが言つていた男の頭を掴んで  
地面にぶつけた

「ほらね、 渚君、 目撃者がいないうち喧嘩しても  
問題ないっしょ」

その時、陽菜乃たちの後ろから歩み寄っていた集団に  
俺は気づいて落ちてあつた固そうな棒で相手をたたいた

「俺とやりあうか」

「なかなかいいじやん、翔。じやあこつちも…っ！」

「カルマ!! 後ろ!!」

カルマが陰から出てきた高校生に鉄パイプで殴られて  
蹴られたりしていた

その後、何とか応戦していたら

「離して!!」

陽菜乃が捕まつた

「陽菜乃!!」

「よそ見すんじやねえよ!!」

一瞬、陽菜乃のほうに目が行くと  
俺は“ビリビリ”という音と電撃を  
くらつて膝から崩れ落ちた

(す、スタンガン…)

朦朧とする意識の中、杉野と渚も殴られたどこまで見ると  
意識を手放した

「渚君、杉野君、蒼海君、カルマ君」

この声で俺は意識を闇から戻すと  
奥田がいた

「よかつた、奥田さんは無事だったんだ」

渚が言つて いると 奥田は 申し訳なさ そうに  
隠れていたことは 言つたが

「いいそれで 正しいよ、 犯罪慣れして いるね、 あいつら。 つて いうか  
俺に 直接 処刑させて ほしいんだけど」  
「… なあ、 カルマ。 俺さあの しおり 最後まで 読んでみたんだけど」

確か、 班員が 拉致された時の 対処法つて のが あつた と 思うんだけど」

皆が 渚の しおりを 確認すると あつた ので

殺せんせーに 電話して 急いで 向かつた

着くと

見覚えのある 車と 人が いたので カルマが ぶつ飛ばして  
中に入つていった

すると、 中から

「きやあー!!」

「陽菜乃ちゃん!!」

「倉橋さん!!」

俺は叫び声を聞いた瞬間扉を開けて中に入つていつた

陽菜乃 side

不良たちに連れてこられたのはどこかの廃墟だつた  
ソファらしきものに座らされると

「この写真おまえだろ?」

有希子ちゃんが固まつている

私たちも写真を除くと

チヤラチヤラなイメージの女の子が映つていた

「神崎さん、これ…」

「結構かわいかつたからさ、めぼしい奴には連絡入れろつてダチに伝えていて、さらつてやろうと思つていたがきえたからあきらめていたがまさか、柵ヶ丘の奴だつたとは」

そのあと、三人で話していた

有希子ちゃんがE組に落ちた理由も聞いて驚いていると  
さつき、話かけていた人が來た

「俺たちと、台無しを経験しようぜ。今まで、エリートを  
どんどん落としてきた、帰つたらこう言えよ仲良く  
カラオケをしてたんだつて。今から10人くらい相手にして  
もらうから」

「さいてー」「

私とカエデちゃんがそういうと  
不良たちは首を絞めた

「エリートだからつて調子乗るんじゃねえぞ!!

今から、お前らもその台無しを経験するんだからな!!」

少ししたら手を離して息を整えていると急に私の腕を掴んだ

「まずはてめえからだ」

連れてこられたのはもう一つのソファで

何をされるか分かったので抵抗したが

中学生が高校生に勝てるはずもなくソファに倒されてしまった

すると、シャツを勢いよく引きちぎつて來た

「きやあー!!」

「陽菜乃ちゃん!!」

「倉橋さん!!」

「色白だな、さあてどうなるか…」

その時、私は心で思つた

(助けて…翔君…)

扉が勢いよく開いたと思つたら私の上に乗つかつていた不良が急に浮かんで壁にたたきつけられた

その場にいた全員が唖然としていると

見たことのある、ネイビー色のカーディガンが

私の上にかぶさつたと思つたら体が宙に浮いて扉の近くまで  
來ていた

「大丈夫か、陽菜乃…」

助けたのは心の中で助けを求めた

翔君だつた

翔 side

陽菜乃の悲鳴を聞いた瞬間

体が勝手に動いていた

後ろで、呼び止める声が聞こえたが、今は陽菜乃のことしか頭の中になかった

蹴破つて扉を開けると陽菜乃の上に不良が乗つかつていた

俺は、殺せんせー用に作つてもらつた

昨日、渡された、二つのうちの一つのワイヤーで

不良を捕まえて壁に投げた

陽菜乃のところに近づくと何をされそうになつたのか一目瞭然で  
来ていたカーディガンを陽菜乃にかけると

手の紐を切つて

抱えて扉まで下がつた

陽菜乃を見ると、今にも泣きだしそうだつたので俺は安心させる  
ように言葉を放つた

「大丈夫か、陽菜乃？」

「…ありがとう、翔君」

言葉を聞くと、不良たちがこちらを見ていた

「渚、行け」

「修学旅行のしおり1432ページ、班員が何者かに拉致られた  
時の対処法、犯人の手がかりがない場合、  
まず、会話の内容やなまりなどから地元の者か  
そうでないかを判断しましよう。

地元民でなく更に学生服を着ていた場合。1344ページ

考えられるのは相手も修学旅行生で旅先でオイタをする輩です。

土地勘のないその手の輩は拉致した後遠くへは逃げない、近場で

人目につかない場所を選ぶでしょう。その場合、付録134ページへ

先生がマツハ20で下見した拉致実行犯潜伏マップが役立つでしょう

「すごいなこの修学旅行のしおり、完璧な拉致対策だ」

「いやー、やっぱ修学旅行のしおりは持つとくべきだね」

「まあ、俺も持ってきてるしな」

「なんで?」

「枕替わり」

「「「「ねえよ、そんなしおり!!」「」」」

「で、どうすんのお兄さんら。こんだけのことしてくれたんだ

この後の修学旅行は全部』入院だよ』」

後ろから足音が聞こえてくる

「呼んどいた連れどもだ、てめえらみたいないい子ちゃんは

見たこともない不良たちに…不良つてええ!!

「確かに、見たことのない不良だな」

「不良など、いませんね。先生は手入をしたので」

「なんだよ、その目隠し」

「暴力沙汰ですので、この顔が見られるのが怖いんです」

世間体を気にしてるし…

「つていうか、殺せんせー俺、あいつらのこと

叩きのめしたいんだけど」

「それは、やめときなさい、翔君。今は倉橋さんを  
守ることに専念しなさい」

そう言つて俺は陽菜乃を見たら震えていた

「了解…」

そこからは圧巻だつた

そりやあ、マツハ20のタコに勝てるわけないだろう

「さあ、私の生徒たちよ。彼らに修学旅行の知識を  
体に教え込みなさい」

すると、不良4人の背後に鈍器（修学旅行のしおり）を  
持つた奥田、カルマ、杉野、渚がいて、ためらいもなく  
振り下ろした

「痛そうだな…」

「そうだね…」

神崎のひもを杉野が茅野のひもを渚がほどくと  
心なしか神崎の顔がスッキリしたものに見えた

神崎と茅野、奥田はすぐさま陽菜乃のところに来て、声をかけていたが“大丈夫”と答えていた

「…陽菜乃、我慢せずに泣きたいなら泣けよ」

俺がこういつたのはわけがあつた

持つてているからわかるが体が震えていたのだとすると、陽菜乃は

「…、怖かつたよー…」

俺に抱き着いて泣き始めた

女子組は背中をさすつたり言葉をかけたりしていく  
殺せんせーと男子組は不良を縛つていて、携帯も  
なぜか壊している

5 分後

泣きつかれたのか眠つてしまつたので  
陽菜乃を俺が抱えたままで帰り道を  
歩いていた

「そういや、翔はどうやつて不良を投げ飛ばしたんだ?」

杉野が聞いてきたため。俺は答えた

「鳥間先生に頼んだ、道具が来たんだよ、そのうち一つが  
ワイヤーで硬いワイヤーに対せんせー物質が  
練りこまれていてるから、それを使つたんだ」「  
けど、それだけじゃ、威力足りなくない?」

「来たのに、ひと手間加えたんだ」

そういうと、スマホを取り出してと渚に言つて

「明、出てきていいぞ」

皆は何のことだかわからない様子だったが  
画面状に男の子が現れて驚いていた  
殺せんせーだつて奥の手の液状化を  
使つていた

「俺さ、機械開発が好きで、人工知能を作つたんだ  
とりあえず、感情はあるから」

『よろしく、E組のみんな』

「よろしく（お願ひします）』

「こいつが操れるように先端にブースターを付けたんだよね  
それで、助けたつて訳』

この話をしているうちに辺りは真っ暗になつていつた

## 修学旅行の時間3時間目

旅館に着く頃にはもう夕飯の時間になつていた

とりあえず、茅野たちが倉橋の服を着替えさせよう  
としたが、どれかわからず、とりあえず

4班全員で殺せんせーが先に向かつた

皆が食べているところに向かつた

途中で杉野が変わろうかと言つてきたが  
陽菜乃が俺の服を掴んでいたために断つておいた

「誰なら、場所知つているかな？」

「片岡とか矢田辺りじゃない」

渚と杉野が話していて、とりあえず、決めたことがある

「皆、岡島と前原は近づけるなよ。カルマ近づいて来たら  
いたずらしていいから」

「「「「わかつてる（ます）」」」

「楽しみが増えた♪♪」

そういうしているうちに大広間に着いた  
楽しそうな声が聞こえる

「杉野、茅野、頼んだぞ」

「「了解！」」

障子を開けるとみんながこつちを見て來た

「やつと來たか、大幅遅れだな」  
「早く、來いよ」

前原危険人物2号と磯貝が言つてきた

「皆、殺せんせーから僕たちが帰つてこなかつた  
理由聞いてないの？」

皆、？を浮かべている

「とりあえず、後で説明するから誰か陽菜乃ちゃんの  
荷物の場所知らない？」

「？知ってるけど、それがどうしたの」

「説明するから」

片岡が知つていたのでこつちに来て説明していると  
陽菜乃が俺にお姫様抱っこされているのに気付いた

女子が数人、こつちに来た

岡島が来ようとしているのが気づいたので

「カルマ…」

「ほいほい、岡島（・▽・）ニヤニヤ…來たらいたずらするよ」

後で、聞いたがこの時のカルマは悪魔に  
見えたそうだ：

「！っていうか、カルマたちのそのケガどうしたんだよ！  
カルマと翔なんて一番ひどいじゃないか！」

「渚、杉野、説明しといて」

慌てる磯貝と

男子たちに説明中

女子たちにも説明中

聞いた岡島がまた来ようとしたので

カルマの悪戯中

とりあえず、陽菜乃の変えの服をもつてきてもらつて  
近くにあつた部屋で片岡に渡して着替え中

俺たち4人はけがの手當で中

ちなみに乗り込んだのを知られた時は

鳥間先生に怒られた

陽菜乃が目を覚ましたので

顔を見せるとまた、俺に抱き着いて泣きそうになつて いた

今度は片岡や矢田たちがいたので泣きはしなかつたが

そのあと、みんなでご飯を食べた

磯貝と千葉辺りにはずつと心配されていた

食べ終わった後、風呂に行くと

カルマがいてどつちとも腰にはタオルを

巻いていて皆が来た時には

俺たちは体を洗い終わって湯船に浸かっていた

覗こうとした男子数人の片岡の説教を聞きながら

また、磯貝に服を着ていて見えなかつたところの

ケガを心配されたり

渚は顔だつたが杉野やカルマ、俺は

腹にくらつたり

何回も蹴られていたので  
余計に心配されていた

ゲームコーナーで神崎のゲームテックニック  
を拝見した後、カルマと一緒に自販機に行つて  
カルマはイチゴ煮オレ、前においしいのか聞いたら  
甘つたるくておいしいと言われた

俺はオレンジジュースをもつて男子たちが寝る場所に  
行くと集まって何かをしていた

「何してんだ?」  
「さあ?」

すると、磯貝がこつちに気づいて

「気になる女子投票だよ、みんな言つてるから逃げられないぞ」

カルマが話し始めた

「俺は奥田さんかな」

「おお、意外なんで」

「だつて、彼女、クロロホルムとか怪しい薬作れそ<sup>うじやん</sup>

俺のいたずらの幅が広がるよ」

(絶対くつつかせたくない「一人だな」)

みんなの心の声がシンクロした

「お前はどうなんだよ、翔」

「よく話すのは、陽菜乃だな」

「疑問なんだけどさ、なんで二人とも  
名前で呼んでんの?」

俺は修学旅行の準備の時にあつたことを話した  
・・・・・詳しく述べは班決めと準備の時間で・・・・・

「……んで、名前で呼ぶようになったわけ」

話し終えたら、窓の外にゴシップタコがいた

「(　：) ゆメモメモ」

「タコがメモつて行つたぞ！」

男子は殺せんせーを追いかけていつた

女子の部屋

「ええ、ビツチ先生、まだ二十歳!!」

「そうよ。で、あんたたち、何してんの」

「気になる男子投票」

## 結果

1位磯貝

2位前原

3位渚

4位カルマ・蒼海

「どれどれ、磯貝や前原はともかくとして  
来て日が浅い、蒼海が入つてるのね」

「探つちやだめですよ」

「私ぐらいになると見ただけでわかるのよ」

一人が視線をそらした

「ねえねえ、ビッチ先生の話聞かせてよ」

「いいわよ、あれは私が十七の時…つてこのタコ  
女の園に紛れ込むんじやない!!」

そのあと、過去のことを聞かれたので  
殺せんせーは逃げた

結局、暗殺になつた

「陽菜乃、頑張んなさいよ」  
「わかつたよ、ビッチ先生」

## 後日の出来事の時間

駅から帰る途中

俺は陽菜乃を送つていた

ちなみにあの高校生たちは

“O H A N A S H I”したから  
もう、襲わないと言つていた  
軽く脅してみた

～～～回想～～～

「次、こんなことしたら

どうなるかわかつて？」

俺は明に集めさせた高校生達  
の情報をもとにいうことを聞かせた

「…………わ、わかりました!!!!」

～～～回想 終了～～～

陽菜乃と話していると家に着いたので  
少し話してから帰ろうとしたが

「…なあ、いくら鳥間先生が説明したからって  
ちゃんと、謝ったほうがいいんじや…」

「大丈夫だよ！変えも買つたし、

こつちがお世話になつているから

お礼しないと」

「そうか、じゃ、また明日。陽菜乃」

「また明日」

陽菜乃 side

翔君の背中を見送ったあと、家に入った

「ただいま♪♪♪」

「！陽菜乃、大丈夫だつたか！」

お父さんが心配してきてくれた

お母さんも心配そうな顔をしている

（二人共、優しいんだよねー）

「大丈夫だよ、助けてもらつたし」

「あら、それって翔君？」

「！よく、わかつたね」

「母さんから聞いた、応援しているぞ！」

私はたわいない話をして一日を終えた

(明日からは学校だ!)

期待に胸を乗せて

朝

「おはよう…眠い」

「陽菜乃、おはよう。学校遅れるわよ」  
「はーい ( 、 ▽ 、 )ノ」

「忘れ物なし、行つてきます!」

「行つてらしやい」

ドアを開けるとそこには

「おはよう、陽菜乃」

翔君がいた

(え、え、ええええええええ!!!!!!)

なんで、どうして！翔君！学校行く途中なのかな  
 でも、反対方向だし、散歩にしては学校通り越してるし  
 どうして！結構、前からいたのかな？なんか  
 ごめんなさい、お昼買うにしても家の近くに  
 あるって言つてたし、この先なんもないし  
 一体何がどうなつてるの（～！）

「陽菜乃…大丈夫か？」

翔君が私を心配して顔を覗き込んできた

「！大丈夫、いきなりいたからびっくりしただけ／＼／＼  
 「？顔赤いぞ」

「大丈夫、ところで翔君はどうしてここに？」

「ああ、前みたいな不良に絡まれば陽菜乃だつて嫌だろう、迎えに来た。陽菜乃、かわいいんだから油断しちゃダメだよ」

「（か、かわいい！）そ、そつか、ありがとう」「じゃあ、翔君。陽菜乃のことよろしくね」

お母さんが会話に入ってきた

いたの、忘れてた

やけに（・▽・）ニヤニヤしている

顔が熱くなってきた

「わかりました！」

陽菜乃が悶々としている間に話が終わっていた

「陽菜乃、行くぞ。遅刻しないように」

「う、うん。分かつた行つてきます」  
「行つてらしやい」

二人が揃つて歩く姿を見ていた陽菜乃の母は微笑ましく見ていた

学校に着くまでに私は恥ずかしかった道ですれ違った人らは翔君のことをカツコいいとか、言いながら歩く女子似合つてるね、と言いそうな顔で見つめてくるおばあちゃんたち

学校についてからも

女子に人気だつた

そんなことを考えてたから

足元の注意がおろそかになつていたイノシシの尻尾を踏んでしまつたのだ

陽菜乃が赤くなりながら下を見ている  
どうしたのだろう？

すると、陽菜乃の足元から  
この山の猛獸の声：イノシシの声が  
聞こえた

岡島はこれに追いかけられて  
ものすごく怖かつたそうだ

俺は陽菜乃の腕を掴むと

「は、走るぞ、とにかく。木を盾にしながら！」  
「うん、さすがに私でもあれは無理！」

そう言つて森林に入つていった

ところが

「なんであいつ！木の位置全部把握してんだよ！」  
「すご」いけど、逃げきれないよ！」

イノシシから逃げ切ることはおろか、  
どんどん、距離を詰められてくる

「きやあ!!」

その時、陽菜乃が斜面でこけた

「陽菜乃！（このままじゃ、転げ落ちる）」

とつさに陽菜乃を抱きしめて  
一緒に落ちていった

陽菜乃 side

斜面で転げ落ちそうになつた時

翔君がかばつてくれた

でも、衝撃が強かつたため

気を失つた…

目が覚めると途中の木に引っかかるつて止まつていた

今の状況に私は赤面した

抱きしめられているからだ

何とか、声をあげそうになるのを我慢して。

起こしにかかる

「翔君、翔君。大丈夫?!」

「う、陽菜乃かそつちこそ大丈夫か」

「私は大丈夫だよ。ケガは?」

「最後に木にぶつかつたときのケガ以外は

大丈夫。かすり傷ばかりだし。薬、塗つてくれないか」  
「いいよ」

翔 side

治療が終わると4時間目の最中だつた

「今から行つたら、昼休みにつきそうだな」「行こうよ」

次はイノシシには出会わなかつた

「遅れてごめんなさい、殺せ…きや！」  
「おおつと、大丈夫か？」

陽菜乃がこけそうになつたのを支えて  
教室を見てみると

B B 弾が床に散らばっていた

「だれか、やつたんだ、これ」

「あ、倉橋さん、翔君」

渚が近づいてきた

「渚、誰がやつたんだこれ？」

「転校生…」

渚が見た方向を見ると

黒い物体があつた

「自律思考固定砲台さん、だつて」

# 自律思考固定砲台の時間

「自律思考固定砲台？なんだそれ」

「とにかく見ていればわかるよ」

「分かった。とりあえず、教務室へ行きますか」

「遅刻した理由、話さないと」

教務室

「よかつたです、不登校になつたらどうしようかと」

教務室に入つたとたんに殺せんせーが

涙？を流しながら近寄ってきた

でも、俺たちの服の汚れを見ると

「ど、どうしたんですか」

更に、マツハで近づいてきた

「じ、実は、イノシシのしつぽを踏んじやつて」「あの、イノシシ。この山の王者みたいじやない？」

陽菜乃が申し訳なさそうに話すのでフォローしておいた

「大変でしたね。そろそろ食べ始めないと昼休みなくなりますよ」

「あ、本當だ、行こうぜ陽菜乃」「う、うん。殺せんせー、また後で」

昼休み

遅刻してきた理由を質問され続けた  
ご飯は食べたがゆつくりする時間がなかつた

## 5時間目

俺は渚が言つた言葉を考えていた

(見ていればわかるよつてどういう意味だ?)

すると、自律思考固定砲台から音が聞こえた  
と思つたら銃などを出して発砲し始めた

(こういうことか)

俺はこれを耐えてきた皆がすごいと思った

次の日

自律思考固定砲台は寺坂達にガムテープでグルグル巻きにされていた

発砲はもちろんできなかつた

その次の日

自律思考固定砲台がキュートになつていた

竹「いいじやないか、2D:Dを一つ失うところから  
女は始まる」

(あれ、竹林、今の初台詞じやない?)

皆で名前を付けることになり

自律から一文字とつて“律”と名づけられた  
開発費で殺せんせーの財布の残高が  
“5円”になつたそうだ

## 夜

俺は忘れ物を取りに校舎に来ていた

帰ろうとすると

足音が聞こえたので反射的に教卓の下に隠れる

来たのは、律の開発者達だつた  
律はどんどん分解されていくが

俺はそれを見過ごすことができなかつた

俺は明に調べさせて

右手に刀、左手に短剣を持つた

これは対殺せんせー用武器だ

(まさか、この場面で使うとはな)

明に頼んだことが終わり

俺は駆け出して行つた

渚 side

朝来ると律は初期状態に戻つていた

「今後は改造行為も危害に加えると言つてきた、  
壊れたら賠償を請求するそうだ」

皆が嫌そうな顔をしている

その時、律が起動した

「これが”元”開発者の意見だ」

「元？」

僕は疑問に思つた。鳥間先生、翔君のほうを見ているような。しかも、眉にしわを寄せてすると、律から花束が出てきた

「花を作る約束をしていました。昨日の夜、

マスター達が改良部分を撤去しようと来ましたですが、蒼海さんが彼らの秘密を暴いて私を助けてくれました」

なるほど、だから翔君は音楽を聴いているのか  
気を紛らわすために

「今の、私のマスターは翔さんです。

殺せんせー、私は翔さんが助けに来る前に  
あの人たちに反抗しました。律は悪い子ですか」

「中学生らしくて大いに結構。それよりも  
翔君！なぜ、取り外したのですか？」

「俺が来る直前にタツチパネルは取り外してた  
見たいでね。協調系のソフト以外は  
これに入れた、あげるよ。律もいらないって  
言つてたし、おんなじ友達もいるし」

翔君のスマホには明君がいた

倉橋さんと4班以外のみんなは当然驚く  
説明してもらい、やっと終わつたころには  
1時間目が終了していた

こうやって、出席番号27番　自律

律が暗殺教室に加入了

# LRの時間

雨が降っている…

「憂鬱だ…、テンションが下がる」

「確かにね」

今、俺は渚と外を見ながら喋っている  
外は大雨が降つており、みんなが傘を  
持つてきていた

「皆さん席についてください、ホームルーム  
を始めます」

殺せんせーが来たか…………。

(なんなんだ、その頭は!!)

律を除く全員の心が一致した

・・・・・こんなことつてあるんだね・・・・・

「殺せんせー、その33パーセントほど巨大化した

頭部について説明を」

「湿気でふやけました、雨は避けたのですが」

という話があつた

俺が今、現実逃避をしているのは

目の前でイリーナ先生がワイヤーで吊られているからだ

ちよつと待つて

今日つて普通だつたよな

reallyの発言の注意とかビデオ見せられたくらいで

そうだ、こういう趣味なんだ  
そう思おう、だつてビツチなんだし

「すみません、イリーナ先生。樂しみのところを  
邪魔してしまって、今すぐ、立ち去ります」「そうじやないわよ  
おろして！」……あ、はい」

ワイヤーを解いた

すると、怖い人が來た

「○△×◇\*⋮」  
「○×△◇⋮」

何となくだが聞き取れる

イリーナ先生を紹介した師匠

ロブロさんか

鳥間先生も喋れるのか…

そこに、殺せんせーが登場

「半分正解で半分不正解ですね」

「何しに来たウルトラクイズ」

「ほんとだウルトラクイズみたい」

「にゅや！ 鳥間先生も翔君もひどいですよ」

とか、いろいろあり鳥間先生がターゲットの  
暗殺が始まった

イリーナ先生は

「カラスマ～お疲れさま、喉乾いたでしよう？  
はい、飲み物、ホラグツといつてグツと」

(なんか絶対入ってる)

失敗

ロブロさんは

真っ向勝負

俺が殺せんせーに課題を出しに来た時に  
椅子の後ろを固定して

真っ向から來たが

相手は元とはいえ精銳部隊にいた人  
あつさりと負けて、負傷し辞退した

その時、イリーナ先生ほうを見て忠告していたら  
殺せんせーまでもがビビついていた

昼休み

イリーナ先生は木の下で休んでいる鳥間先生のもとに近づいて色仕掛けを仕掛けてみんながあきれているとワイヤーで足をひっかけ上を取つた

そのあと、何かを喋つていてナイフが当たつた  
イリーナ先生の残留が決定した

陽菜乃を送つた後の帰り道

家の前まできて中に入り、靴を脱いでいると  
ドツクン！

「う、またか…！」

リストバントの下から紫色の光が発光していた  
翔には全身に激痛が発生しており、ついには  
廊下に倒れこんだ、

彼が倒れても家族は来ない、一人暮らしなのだ

あまりにもの激痛で氣絶した

30分後

翔は目を覚ました

「封印が解けているのか、いいことなんだが

これはきつい」

リストバントのしたには

紫色のチエーンみたいな柄のあざがあつた

翔は何事もないように普通に一日を過ごした